

誠意伯秘授天官五星玄澈通旨

『滴天髓闡微』通神論

任鐵樵增註

袁樹珊撰輯

小山内彰 訳註

©2013 Akira Osanai
shihei.com

本書の全部または一部を無断で複写複製
(コピー)することは、著作権法上での
例外を除き、禁じられています。

序文

『滴天髓』てきてんずいは、1300年代の元代末げんたいから明代初期みんごろに活躍した劉基りゅうぎ（劉伯温りゅうはくおん）によつて著あわされた書といわれていますが、著者が実際に劉基りゅうぎであったかどうかは文献考証的に定かではないのが事実です。しかし、『滴天髓』の内容や文章からして、その著者は卓越した見識の持ち主であったことを窺い知ることができます。

本書に掲げた『滴天髓』の原文は、1933年（癸酉みずのととり）に袁樹珊えんじゆさんにより撰輯せんしゅうされた『滴天髓闡微』てきてんずいせんびを参照しています。また『滴天髓闡微』自体は、1800年頃、任鐵樵にんてつしやうによつて公刊された『滴天髓』の評註です。

なお、『滴天髓闡微』は、「通神論」（「通天論」としている書も存在する）と「六親論」りくしんろんの2つに大きく章立てされ、「天道」「地道」「人道」「知命」などの節が設定されていますが、これらはおそらく『滴天髓』の原文にはなかったもので、任鐵樵氏か袁樹珊氏のいずれかにより追記されたものではないかと思われま

また、以下の拙解において「原文」と表記してあるものは、『滴天髓』の元の文を指し、「原註」とあるのは、劉基による評註とされているものであり、「任註」は、任鐵樵による評註となります。

なお本書は、2008年頃から、自サイト「四柱推命のホントのところ」で無償で公開していた和訳を見直し、まとめたものです。その和訳には実例は1例も掲載していませんでしたが、書籍にするにあたり、内容を見直すとともに、清朝の康熙帝、雍正帝、乾隆帝、また、蒋介石など歴史上の著名な人物の実例を追記し、推命を学んではいても、中国古典に接する機会のない人が目にするような実例を掲げることにしました。

また、本書の『滴天髓』の原文に関する解説の部分は、幅広く多くの方にお読みいただけると思いますが、実例の解説の部分をご理解いただくには、既刊『サクサクわかる四柱推命の本』を読了されている必要があります。

今回追記しました実例の典故は、『滴天髓闡微』の任氏の註中に掲載されているもののほか、おもに徐樂吾氏の『命理一得』、『古今名人命運鑑賞』鐘義明著（1991）

です。『古今名人命運鑑賞』鐘義明著は近年の書ですが、現在手元にない徐樂吾氏の著書『古今名人名鑑』と重なっている部分もあるため参考にしています。この書には、黒澤明監督、山口百恵、中森明菜などといった日本人のほか、ケネディ大統領、マリリン・モンローなどのアメリカ人などの実例も取り上げています。

また、中国の歴史上の人物に関する説明には、ウィキペディア、そしてユーチューブにある東洋歴史学者・宮脇淳子先生の動画を参考に行っている部分が多くあります。

本書の漢文の和訳ですが、高校時代に漢文の授業を受けたあと、社会に出てから12年ほどの間、漢文に触れる機会があり、独学で学び直したものによります。大きな誤りはないとは思いますが、漢文の専門家をご覧になったなら問題があるかも知れません。しかし、漢文の専門家が『滴天髓』を和訳してくれることはないでしょうから、こうして自力で和訳して出刊するしかないのが現状です。

著者記す

平成25（癸巳）年12月

目錄

序文..... 3

通神論

天道..... 17

欲識三元萬法宗。先觀帝載與神功。

地道..... 20

坤元合德機緘通。五氣偏全定吉凶。

人道..... 25

戴天履地人爲貴。順則吉兮凶則悖。

知命……………30

要與人間開聾聵。順逆之機須理會。

〈实例〉清朝 第四代皇帝 聖祖 康熙帝……………36

理氣……………40

理承氣行豈有常。進兮退兮宜抑揚。

〈实例〉命家 任鐵樵……………45

配合……………50

配合干支仔細詳。定人禍福與災祥。

天干……………52

五陽皆陽丙爲最。五陰皆陰癸爲至。

五陽從氣不從勢。五陰從勢無情義。

〈实例〉命家 袁樹珊……………56

甲木參天。脱胎要火。春不容金。秋不容土。
火熾乘龍。水宕騎虎。地潤天和。植立千古。

乙木雖柔。剗羊解牛。懷丁抱丙。跨鳳乘猴。
虛濕之地。騎馬亦憂。藤蘿繫甲。可春可秋。
丙火猛烈。欺霜侮雪。能鍛庚金。逢辛反怯。
土衆成慈。水猖顯節。虎馬犬鄉。甲來焚滅。
丁火柔中。內性昭融。抱乙而孝。合壬而忠。
旺而不烈。衰而不窮。如有嫡母。可秋可冬。
戊土固重。既中且正。靜翕動闢。萬物司命。
水潤物生。火燥物病。若在艮坤。怕冲宜靜。
己土卑濕。中正蓄藏。不愁木盛。不畏水狂。
火少火晦。金多金光。若要物旺。宜助宜幫。
庚金帶殺。剛健爲最。得水而清。得火而銳。
土潤則生。土乾則脆。能贏甲兄。輸于乙妹。
辛金軟弱。溫潤而清。畏土之疊。樂水之盈。
能扶社稷。能救生靈。熱則喜母。寒則喜丁。
壬水通河。能洩金氣。剛中之德。周流不滯。
通根透癸。冲天奔地。化則有情。從則相濟。

癸水至弱。達于天津。得龍而運。功化斯神。
不愁火土。不論庚辛。合戊見火。化象斯真。

〈實例〉 清朝 第五代皇帝 世宗 雍正帝

地 支

陽支動且強。速達災祥。陰支靜且專。否泰每經年。

生方怕動庫宜開。敗地逢冲子細推。

支神只以冲爲重。刑與穿兮動不動。

暗冲暗會尤爲喜。彼冲我兮皆冲起。

旺者冲衰衰者拔。衰神冲旺旺神發。

〈實例〉 清朝 第六代皇帝 高宗 乾隆帝

干支總論

陰陽順逆之說。洛書流行之用。其理信有之也。其法不可執一。

故天地順遂而精粹者昌。天地乖悖而混亂者亡。
不論有根無根。俱要天覆地載。

天全二氣。不可使地德莫之載。

〈実例〉天全・地全一氣の希少な実例 遊郭と賭博で破滅……………

地全三物。不可使天道莫之容。

陽乘陽位陽氣昌。最要行程安頓。

陰乘陰位陰氣盛。還須道路光亨。

〈実例〉清朝 第九代皇帝 文宗 咸豐帝……………

地生天者。天衰怕冲。

天合地者。地旺喜靜。

甲申戊寅。眞爲殺印相生。庚寅癸丑。也坐兩神興旺。

上下貴乎情協。

左右貴乎同志。

始其所始。終其所終。富貴福壽。永乎無窮。

〔實例〕 清朝 西太后 慈禧

形 象

兩氣合而成象。象不可破也。

五氣聚而成形。形不可害也。

獨象喜行化地。而化神要昌。

全象喜行財地。而財神要旺。

形全者宜損其有餘。形缺者宜補其不足。

方 局

方是方兮局是局。方要得方莫混局。

局混方兮有純疵。行運喜南或喜北。

若然方局一齊來。須是千頭無反覆。

成方干透二元神。生地庫地皆非福。

成局干透一官星。左邊右邊空碌碌。

〔實例〕 清朝 第十代皇帝 穆宗 同治帝

八格……………253

正財、偏財、正官、偏官、正印、偏印、食神、傷官、是也。

財官印綬分偏正。兼論食神傷官八格定。

影響遙繫既爲虛。雜氣財官不可拘。

體用……………262

道有體用。不可以一端論也。要在扶之抑之得其宜。

〈实例〉清朝 第十一代皇帝 德宗 光緒帝……………272

精神……………276

人有精神。不可以一偏求也。要在損之益之得其中。

月令……………279

月令乃提綱之府。譬之宅也。人元爲用事之神。宅之定向也。不可以不卜。

生時……………285

生時乃歸宿之地。譬之墓也。人元爲用事之神。墓之定方也。不可以不辨。

衰旺……………289

能知衰旺之真機。其于三命奧。思過半矣。

中和

既識中和之正理。而于五行之妙。有全能焉。

〔實例〕 清朝 第十二代皇帝 遜帝 宣統帝 愛新覺羅溥儀

源流

何處起根源。流到何方住。機括此中求。知來亦知去。

通關

關內有織女。關外有牛郎。此關若通也。相邀入洞房。

官殺

官殺混雜來問我。有可有不可。

傷官

傷官見官果難辨。可見不可見。

清氣

一清到底有精神。管取生平富貴真。澄濁求清清得去。時來寒谷也回春。

311

308

303

300

297

294

291

〈實例〉革命家 孫文 孫中山

濁氣

滿盤濁氣令人苦。一局清枯也苦人。半濁半清猶是可。多成多敗度晨昏。

真神

令上尋真聚得真。假神休要亂真神。真神得用生平貴。用多終爲碌碌人。

假神

真假參差難辨論。不明不暗受迷遭。提綱不與真神照。暗處尋真也有真。

剛柔

柔剛不一也。不可制者。引其性情而已矣。

順逆

順逆不齊也。不可逆者。順其氣勢而已矣。

〈實例〉初代中華民國總統 蔣介石

寒暖

天道有寒暖。發育萬物。人道得之。不可過也。

355

349

347

342

339

332

326

320

燥 濕…………… 369

地道有燥溼。生成品彙。人道得之。不可偏也。

隱 顯…………… 379

吉神太露。起爭奪之風。凶物深藏。成養虎之患。

衆 寡…………… 384

強衆而敵寡者。勢在去其寡。強寡而敵衆者。勢在成乎衆。

震 兌…………… 394

震兌主仁義之真機。勢不兩立。而有相成者存。

坎 離…………… 403

坎離宰天地之中氣。成不獨成。而有相持者在。

【參考文獻】…………… 408

あとがき……………

何知其人富。財氣通門戶。

何知其人貴。官星有理會。

本文中、◇内は原文の読み下しで、◇内は和訳の引用。□内は、漢文の引用、または意訳です。

天道

欲識三元萬法宗。先觀帝載與神功。

《三元の萬の法の宗を識るを欲するなれば、先ず帝載と神功を觀よ。》

- ※欲…〈動詞〉ほつする。ほしがる。望む。…したいと思う。
- ※三元…天地人のこと。天元、地元、人元。三才もほぼ同意。
- ※萬…万…非常に数が多いこと。またそのさま。
- ※法…生活にはめられた枠。おきて。
- ※宗…中心となるもの。また主となる考え。
- ※帝…世界をとりまとめる最高の神。
- ※載…上にのせる。
- ※與…与へト…〈接続詞〉…と。AとBと。
- ※神功…人間の知恵では考えられないほど不思議な働き。仕事。
- ※所謂…いわゆる。いうところの。

※本…〈副詞〉もともと。本来。

※播…〈動詞〉まく。ちらす。まきちらす。

【解説】

三元の通常の意味は、天地人あるいは三才のことで、広義に解するならば、世の中全体という、大局的な意味合いともなります。四柱推命においては、三元は天元、地元、人元のことを指し、天元とは天干であり、地元とは地支であり、人元は支中の蔵干のことになります。人はこの世に生まれるにあたり、これら三元の「氣」を稟^うけているとするのが、古来より、陰陽五行論、そして四柱推命の大前提になっています。

「氣」とは、原註に、「春木、夏火。秋金、冬水、季土。」といわれていることからわかるように、四季のめぐりに伴う周期性に起因する作用であり、四季の変遷を表わす旺相死囚休に関わることと理解すべきことです。

三元について任註には、「干爲天元。支爲地元。支中爲人元。」とあり、〈干は天元となし、支は地元となし、支中所蔵するを人元となす〉とあり、干と支との構成・関連

を明快に論じています。「所蔵」するとあるのは、十二支中の蔵干であり、支の中には干が蔵されていることが自明のことといわれているのです。

続けて任註に、「人之稟命。萬有不齊。總不越此三元之理。所謂萬法宗也。」とあり、意識するなら、へ人は三元の気を稟け、この世に生まれいづるものであるが、その稟け方は人によりすべて異なることになるものの、その相違は三元の理を越えるものではない。これこそがいわゆる萬ばんの法ほふである。∨となります。

「帝載」について任註には、「陰陽本太極。是謂帝載。」〈陰陽はもともと太極であり、これを帝載という。∨とあり、「神功」については同じく任註に、「五行播于四時。是謂神功。」〈五行は四時にちらばり、これを神功という。∨とあります。ちなみに〈四時〉とは四季のことです。「帝載」と「神功」の意味は、任氏の評註にある通り、四柱推命の基本原理は陰陽論であり、五行論であると解するのが妥当であると考えられます。

つまり、この冒頭の『滴天髓』の原文を意識しますと、

へ人は天地人三元の影響をうけこの世に生せいをうけるものであるから、その三元を根

源的なものとする人の命運を知ることを欲するのであるなら、何をおいてもまず陰陽五行の理を極め尽くさなければならぬ。〈
とっているものと理解することができるとは。

地道

坤元合徳機緘通。五氣偏全定吉凶。

《坤元は徳に合い機緘は通ず。五氣の偏りと全くするは、吉と凶を定むる。》

※坤元へコンゲン〈…大地。万物のもと。つち。

※徳…ものに備わった本性。恩恵。

※合…あわせる。あう。

※機…物事の細かい仕組み。からくり。きざし。ことが起こる細かいかみ合い。秘密。

※緘〈カン〉…〈動詞〉とじる。口を閉める。つぐむ。封をする。〈名詞〉とじ縄。封。

※全…〈形容詞・名詞〉まったし。欠けたところがない状態。

※乾元〈カンゲン〉…万物を創り出す天の原理。

※資始…それを元にして生じる。「大哉乾元。萬物資始。」とは、『易經』えきぎょうからの引用で、

読み下しは〈大いなるかな乾元。万物資りて始む。〉となる。

※哉〈カナ・ヤ〉…〈助詞〉感嘆の語気をあらわす助辞。

※資…〈動詞〉たすける。用立てる。はかる。

※健…〈形容詞〉たけし。すこやか。元気があふれて力強いさま。

※煦〈ク〉…〈動詞〉あたためる。「煦育」恵みをかけてあたたく育てる・はぐぐむの意。

※嫗〈オウ〉…〈名詞〉背中のかがんだ老婆。老いた母や親しいおばさんを呼ぶ言葉。「嫗

煦」〈ウク〉は、「よしよしとって子どもをふところに抱いてあたためる」の意。

※覆〈フク〉…〈動詞〉くつがえる。くつがえず。おおう。「覆育」天地が万物を守り育てること。

【解説】

冒頭の句には、三元の理を識りたいのなら陰陽五行論の理を極めよ、とありましたが、ここでは「地道」という観点から、「偏全」という陰陽五行のあり方により、人に吉と凶の相違が発生する理が説かれています。

〈坤元は徳に合い〉は、一般的な意味で直訳するなら、「大地は天の恩恵に合い」となります。後半の〈機緘は通ず〉の〈機緘〉の意を、「坤元に備わった封印のようなからくり」と理解するなら、〈機緘は通ず〉は、〈封印が解かれ、通じる〉という意味に解することができます。

以上を通して意識するなら、〈大地は天からの恩恵をうけることにより、その中にもともと備わっている機能・作用の封が解かれ、表出されることになる〉といわれているものと理解できません。そして字数の都合か、この句の中には、人への影響が触れられていないのですが、あえて追記するなら、「人はこの天と地の気をうけ、その影響をうけている」といわれていると考えられています。

つまり、天の気が契機となり、地の気はそこに内包される作用を表出することになるものであるが、その作用の根元は冒頭の句にいわれているように、三元、陰陽五行にあり、その作用の元素とも言えるものは「五気・五行」ということになります。

つまりここで気をつけるべきことは、人の命運は天の気と地の気という外的な影響によりすべて決定されていると考えるのは誤りであることです。すべての吉凶の原因は、

その人自身の中にもともと存在しており、天の気、地の気は万人共通ですが、それぞれの人にもともと存在している「氣」が引き出され、顕在化することにより、千差万別の命運の違いが発生するものであると理解すべきです。

任註には、「大哉乾元。萬物資始。」へ大いなるかな乾元。万物資りて始む。▽と『易經』の一節を引用し、続けて、「至哉坤元。萬物資生。乾主健。坤主順。順承天。德與天合。煦嫗覆育。機緘流通。」とあります。これを意識しますと、

へ坤元に至りて万物をたすけ生じる。天である乾は力強く能動的であり、坤である大地は順であり受動的である。天の気をうけ、地の気はこれにしたがうことにより、徳は天に合することになり、それは子供を懐に抱えてあたためるようなことである。これによって、地の気の中にある、いろいろなよし悪しを含めた可能性が、封を切るように表出することになるのである。▽

となり、『滴天髓』の簡潔過ぎて理解が難しい内容を、少しでも補おうとしているのです。

原文の後半の句にへ五氣の偏りと全くするは吉と凶を定むる。▽とあるのは、四柱

推命においては、吉凶・よし悪しの判断の基準は、五気、すなわち五行の偏りと調和がその鍵を握っているという意味です。つまり、原則論として言うなら、五行が偏るなら凶であり、全くするなら吉であるのです。偏るとは、強すぎる、弱すぎるの両方の意を含んでいます。したがって、この「偏全」の判別は、四柱推命において吉凶をみる際に、重要な視点となるのです。

ただし、「偏全」によって吉凶を定めるといふ観点は基本的には正しいとは言えますが、現実には社会生活を営んでいる方々の命運を論じるとなると、「偏全」という2分類では収まるわけはなく、さらに高度な理解が求められることとなります。

「五行の調和⇨吉・幸福」という方程式は、古来より延々と語り継がれてきた定理のような考え方はありますが、実証的に、今一度見直すべき余地を抱えた問題であると考えられます。

右のように「今一度見直すべき」と書いたのは3年ほど前。そのすぐあと「通変の調和」という視点を採用することにより、さまざまな問題が解決しました。『滴天髄』は名著ですが、「五行の調和」だけで、人の幸不幸を論じていた点は大きな誤りと言えます

す。なお、「通変の調和」については、拙著『サクサクわかる 四柱推命の本』を参照してください。

人道

戴天履地人爲貴。順則吉兮凶則悖。

《天を戴^{いた}き、地を履^ふみ、人は貴となす。順すなわち吉、凶すなわち悖^{もと}る。》

※載〈タイ〉…〈動詞〉いただく。じつと頭の上ののせておく。

※履〈リ・ハク〉…〈動詞〉ふむ。足でふむ。人としての道。

※悖〈ハイ〉…〈動詞〉もとる。道理にそむく。

※凡〈ハン・ボン〉…〈副詞〉およそ。総じて。全体をおしなべて。全部で。

※物〈ブツ・モツ〉…〈名詞〉動物・植物・鉱物に3別し、また天然物、人工物に両分する天

地間に存在するもの。物事。事柄。

※即〈シヨク・ソク〉…〈副詞〉すなわち。〈接続詞〉たとえば。仮定の意を表わす。

※羽・蟲(虫)・毛・鱗・介(カイ)∴「羽」は鳥類。「蟲」は昆虫。「毛」は獸。「鱗」は魚類。「介」は貝類。

※專∥專(セン)∴〈動詞〉もつぱらにする。ひとりじめにする。

※屬∥屬(ゾク)∴〈動詞〉仲間に入っている。

※如(ジヨ・ニヨ)∴〈接続詞〉ごときは。文の始めにつけて、…などは。…にいたっては。

※惟(イ・ユイ)∴〈副詞〉ただそれだけ。

※中∴〈動詞〉あたる。かなめをつきとおす。まんなかにくる。

※獨∥独(ドク)∴〈副詞〉ひとり。それだけ。

【解説】

『滴天髓』の前文に〈五氣の偏かたよりと全まくするは、吉と凶を定さだむる。〉とありましたが、この句では「人道」という観点から、「順悖」により、同様に吉と凶の相違が発生するといわれています。

まず〈天を戴いたき、地を履ふみ、人は貴きとなす。〉とありますが、万物の靈長であるから人は〈貴きとなす〉といっていると解するのはいかにも現代的な解釈でしかなく、正し

いとは言えません。人は〈貴きとなす〉とっている根拠は、人のみが、陰陽五行論で示される天と地のはたらきである五行の氣に呼応し得る唯一の存在であると考えられていたからなのです。

この点について、任註に古いにしえの人々の世界觀を垣間見ることができ、次のような興味深い一文を見ることができます。

凡物莫不得五行戴天履地。即羽（蟲が脱字？）毛鱗介。亦各得五行專氣而生。如羽蟲屬火。毛屬木。鱗屬金。介屬水。惟人屬土。土居中央。木火金水中氣所成。獨是五行之全爲貴。

へおよそこの世に存在するものは、天を戴いたき、地を履ふみ、五行（の氣）を得ないものはない。鳥類、獸、魚類、貝類もまた、それぞれ五行を得、その氣をもつぱらとし、生まれる。鳥類と昆虫は火かに属し、獸は木もくに属し、魚類は金きんに属し、貝類は水すいに属する。ただ人のみが土どに属する。（人が属する）土は中央にあり、木火金水の氣を成すところに中あたる。（それゆえ）人のみが五行を全まくし、貴となす。〈首肯できる内容は全くありませんが、陰陽五行論を考える上で参考になる部分はありません〉

ます。また「貴」の意味は、日本語の「とおとい」ではなく、「希少な存在である」ということのようにです。『滴天髓』原文にもたびたび「貴」の文字を見ることになりますので、留意すべき点となります。

続いて、へ順なればすなわち吉、凶はすなわち悖る。〓とありますが、前句で「偏全」により吉凶が定まるといわれ、ここでは吉凶は「順悖」による、と異なる表現でいわれていることの違いを明らかにする必要があります。

「偏全」の意味するところは、五行それぞれの力量的な面のことでしたが、ここではへ天を戴き、地を履み〓とあることから、天干と地支蔵干の関わりに触れられていると考えられます。つまり、「順悖」は、四柱八字における干・蔵干の並び方に起因する、構造に由来する作用的な相違に触れた視点であると考えられます。

四柱八字は天干と蔵干で構成され、干と干が隣接することにより生・剋・幫の作用の影響を及ぼし合っていますが、「順悖」の意味するところは、干の並び方により発生する生・剋・幫の作用の結果が、日干の強弱に影響を及ぼし、そのことが吉と凶の現われ方の違いに関わる、といわれているものと解すべきでしょう。

任註に「順悖」について、次のような説明があります。

如天干氣弱。地支生之。地支神衰。天干輔之。皆爲有情而順則吉。如天干衰弱。地支抑之。地支氣弱。天干剋之。皆爲無情而悖則凶也。

へたとえば天干の気が弱く、地支がこれを生じる。（あるいは）地支の神が衰え、天干がこれを輔けるたす。みな有情にして順であるので、吉である。たとえば天干が衰え弱く、地支がこれを抑える。（あるいは）地支の気が弱く、天干がこれを剋す。みな無情にして悖であるので、凶である。▽

『滴天髓』では、日干を中心に据えて、その強弱をもとに吉凶の判別をするのが原理・原則ですから、その点を踏まえつつ、右の一文を理解するなら、大いに参考になる面はあると言えます。

また日本の書店に並んでいる推命の書に、生じるのは吉であり、剋するのは凶であるという硬直した理解をもとにした解説を多くみかけますが、200年ほど前に著わされた任註に、すでに生と剋の作用は、四柱八字の状態により、吉になることも凶になることもあるといわれているのです。